

## 定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その5）

その他のタイトル	Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (V)
著者	清水 達哉, 妹尾 美鈴, 有福 和, 羽田野 瑛子, 宮地 佑香子, 結城 進矢, 向阪 俊佑, 佐藤 栞, 中田 行重
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	5
ページ	109-117
発行年	2015-03-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018754">http://hdl.handle.net/10112/00018754</a>

---

## 定時制高校に対する地域臨床的支援の試み(その5) Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (V)

---

清水達哉 妹尾美鈴 有福 和 羽田野瑛子  
宮地佑香子 結城進矢 向阪俊佑 佐藤 栞 中田行重  
関西大学臨床心理専門職大学院

Tatsuya SHIMIZU, Misuzu SENOH, Nodoka ARIFUKU, Hanako HATANO,  
Yukako MIYAJI, Shinya YUKI, Syunsuke KOUSAKA, Shiori SATOU, Yukishige NAKATA  
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

### ◆要約◆

ある定時制高校への大学院生による地域臨床的な支援活動も5年目を迎えた。今年度も、昨年同様、相談室内外での生徒対応や授業内支援、年に2回のグループワークの実施、先生方との共有ファイルの活用に取り組んだ。また、新たな取り組みとして相談室の広報活動の1つとなる相談室通信の発行を開始した。本稿では、筆者らの活動内容について報告し、活動を「改訂版支援モデル」の6つの構成要素に分けて考察し、そのモデルの指針としての妥当性を検討した。その結果、そのモデル論の通り、支援活動の浸透化と先生方との連携を継続することで基盤ができ、支援活動が充実し、その支援活動によって更にその基盤が強固になることを確認することができた。このことにより、前年度より引き継いだ支援モデルは年度を越えて、筆者らの活動の指針となることが明らかになった。

キーワード：改訂版支援モデル、相互作用、定時制高校、地域臨床

### Abstract

It has been 5 years since a team of graduate students began offering psychological support to an evening high school. Our activities for this year have been essentially the same as in previous years: providing the students with opportunities to talk with us in and out of the consulting room, supporting their learning in the classroom, organizing and facilitating one hour of group work every six months, and creating files about students to share with the teachers. In addition, we began this year to issue our community papers to let the students and teachers know about us. The article first gives a detailed description of our support activities and examines the revised support model (Inoue, Okawa, Shibukawa et al., 2014) to determine if it is valid enough to explain our activities by dividing them into the six components. Consequently, the model proved to be in accordance with the interactive fact that the basis of our support activities was secured

through continuous permeation of the activities and cooperation with teachers, which allowed the activities to be more fruitful, leading the basis of the activities even secured. It is indicated that the model can be a guideline for our activities.

Key Word: revised support model, interaction, evening high school, community psychological practice

## はじめに

ある定時制高校からの支援要請に対して、教員と大学院生によるチームを組み、主に大学院生がボランティアとして支援を行うという試みも、筆者らで5年目を迎えた(中田・中村・日野ら 2011; 倉石・横谷・梅井ら 2012; 山見・細見・吉川ら 2013; 井上・大川・澁川ら 2014)。この活動が、昨年度までどのような経過を辿ってきたのかについて、以下に簡潔に記す。

1期(中田・中村・日野ら 2011)は、主に先生方との話し合いや授業内支援などを通して、支援の目的を探った年であった。また、進路をテーマとしたグループワーク(以下、GWとする)を行った。これらの活動を通して、中田・中村・日野ら(2011)は、心理的内面を見つめるGWを行うことやその効果を調べること、相談室や大学院生が生徒にとって、より親しみやすい存在になることも課題として挙げた。2期(倉石・横谷・梅井ら 2012)は、専門性を活かす支援を行うことを目的として活動を行った。授業内支援やGWに加え、学力やコミュニケーション能力に課題がある生徒について心理学的観点から記録をまとめた(以下、ケース化とする)。また、スクールカウンセラー(以下、SCとする)との連携を図るため、話し合いの場を設けた。これらの活動を通して、倉石・横谷・梅井ら(2012)は、ケース化をする上で、先生方に情報共有の重要性を理解していただくということを課題として挙げた。3期(山見・細見・吉川ら 2013)は、校内支援委員会への参加、広報活動の一環としての生徒・先生方へのチラシ配布や挨拶、先生方との情報共有を行った。また、これらの活動を基に、山見・細見・吉川ら

(2013)は、「チームで行う支援モデル(以下、旧支援モデルとする)」を提案した。そして、先生方からのニーズを参考にしながら、この旧支援モデルを柔軟に変化させ、どのように活動を継続していくかを課題として挙げた。4期(井上・大川・澁川ら 2014)は、定時制高校の現状として、普通科に比べて中途退学者や長期欠席者の割合が高い(文部科学省 2012, p.81)ことを挙げ、活動方針にドロップアウト防止を加えた。ドロップアウトの早期予防の一環として、入学式などの学校行事への参加や校内巡回といった働きかけを行い、「ほっとステーション」(筆者らが活動を行う相談室、以下、HSとする)との繋がり作りや、授業内支援等に取り組んだ。また、これらの活動を基に、井上・大川・澁川ら(2014)では、「改訂版支援モデル(詳細は、Ⅲ. 考察にて記す)」を提案し、先生方との連携の強化やHSという名前の認知度の低さを課題として挙げた。以上のことから、筆者らにおいても定時制高校の中途退学者が多いという現状を踏まえ(文部科学省 2014, p.94)、ドロップアウト防止を継続方針として活動を行った。本稿は、4期(井上・大川・澁川ら 2014)の改訂版支援モデルに基づいて行った活動内容や、新たに行った取り組みについて報告し、改訂支援モデルについて再度検討を加えることを目的とする。

## 活動

以下、筆者らの支援活動を生徒対応、授業支援、グループワーク、広報、ファイルを用いた情報共有、の順で紹介する。なお、筆者らの言葉を〈 〉、生徒の言葉を『 』、強調部分を

“ ”、補足部分を（ ）で示す。

## 1. 生徒対応について

筆者らの主な活動は、生徒たちが登校している4月～3月（内、休業期間を除く）の毎週月曜日と木曜日に行われており、6名の担当院生がそれぞれの曜日に3名ずつに分かれ、19:00～20:40の時間にHSを開室している。

筆者らの生徒対応は主にHSと共有スペース（廊下に隣接するロビー部分、以下、CSとする）で行われている。今では多くの生徒が来室しているが、筆者らが担当して間もない頃は生徒たちの自主的来室は今ほど多くはなかった。筆者らは生徒達に積極的に話しかけ、HSの存在とその利用法を伝えていった。時には先生方からのリファーにより来室するようになった生徒もいた。また、HSやCS以外での活動として校内巡回も行っている。教室には1人で食事や勉強をしている生徒や、HSやCSを訪れることのない生徒がおり、そこで筆者らが声をかけることで新たにその生徒らとの繋がりができた。それに加えて筆者らは近年、文化祭や餅つき大会等、多くの学校行事にも参加している。特に文化祭では、たくさんの生徒が自身の持ち味を活かした取り組みを発表しており、筆者らが見に行き感想を伝えることで生徒との関係がより一層深まっていった。このように、筆者らはHSでの活動とHS外での活動の2点を中心に生徒対応

を行っている。これらの活動を続けることにより本年度は昨年に比べ大幅に生徒対応数が増えた。

## 2. 授業内支援について

昨年度に引き続き、授業内支援を今年度も実施している。尚、ここでいう授業内支援とは昨年度の教室内支援のことである（井上・大川・澁川ら 2014）。ここでは前述した昼休みにおける教室内での支援と区別するため授業内支援とする。

筆者らは授業内支援に入る前に先生方にコンタクトを取り、その授業でどの生徒がどのような困難を抱えているか、それに対してどのような支援方法が考えられるかについて話し合った。その後、HSやCSにいる生徒に授業の出席を促す声かけを行い生徒とともに授業に入るようにした。こうした取り組みにより、生徒が筆者らとともに授業に向かうという流れができ、今では生徒自ら『授業に（院生は一緒に）行かないの?』と時折声をかけてくるようになった。井上・大川・澁川ら（2014）は「一人の生徒に密着するのではなく、クラス全体に目を配るよう」心掛けて支援に臨んでいたが、今年度は先生と事前に話し合うことによって、クラス全体への配慮を重視した取り組みだけでなく、支援の必要な生徒に対し個別対応を重視した取り組みをも可能にした。そして授業終了後は、先生と授

Table 1. 来室者数一覧（昨年度）

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
4月	7	2	2	2	13
5月	4	5	0	4	13
6月	13	2	2	2	19
7月	4	1	0	0	5
9月	4	3	1	5	13
10月	2	3	2	4	11
11月	2	1	4	8	15
12月	0	0	0	2	2
計	36	17	11	27	91

Table 2. 来室者数一覧（今年度）

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
4月	20	5	2	3	30
5月	29	11	9	10	59
6月	24	11	8	19	62
7月	21	9	14	13	57
9月	20	10	13	13	56
10月	31	8	15	29	83
11月	28	9	17	19	73
12月	21	7	31	18	77
計	194	70	109	124	497

業の中の生徒の様子について簡単に振り返りを行った。また、授業内支援を行うことで、普段HSへ入室することがなく院生との関わりが少なかった生徒との交流が生まれ、授業以外の場面でも会話ができるようになった。

### 3. グループワークについて

筆者らは近年、年に2回のGWを行っている。5年目になる今年度も前期と後期の2回に分けてGWを実施した。後期のGWについては、本論文の提出期日までに実施していないため、本稿での言及は控えることにする。ここでは主に前期GWについて以下に詳細を述べる。

前期のGWでは定時制高校の1年生を対象にフォーカシング指向アートセラピーに含まれるワークの1つである、カンパセッション・ドローイングを実施した。カンパセッション・ドローイングでは互いに言葉での会話はせずに、絵を描くことで会話をすすめていく。尚、生徒には〈絵で会話してみよう！〉という取り組みとして紹介している。筆者らは、生徒たちに安心してGWに参加してもらうために“絵を描く時に守ってほしいこと”と“絵について話す時に守ってほしいこと”の2つのグラウンドルールを設けた。前者のルールでは〈①人が嫌な思いをするようなものは描かない、②人が描いているものをきちんと見る、③描いているときは話をしない〉と説明し、後者のルールでは〈①人の話は真剣に聞く、②描いた人自身を否定するようなことは言わない〉と説明した。そして、GW実施後2週間以内に参加した生徒たちのGWでの様子や感想をまとめた文書を先生方に提出する。また、参加した生徒たちには参加したことへの感謝とワークを共に行った院生からのメッセージを口語表現にまとめて、個別フィードバックとして配布している。

筆者らはGW実施に際して、GWの対象学年や実施する時間、内容等、先生方のニーズと筆者らが提供できるもののすり合わせを綿密に行っていた。支援の時間は限られており、短い

時間で話し合いを進めていたため、先生との協議は数ヶ月の期間を要するものとなった。こうした取り組みが実を結び、前期のGWでは初めてGW前に院生と先生方数名による“はじまりの会”が開かれることとなった（空き教室に院生と先生方が集まり、各院生の自己紹介と挨拶をした。ここではそれを“はじまりの会”と呼ぶ）。GWを実施する前にこのような時間を先生方にとっていただいたのは本年度が初めてのことである。

### 4. HSの広報活動について

筆者らの高校支援活動において、校内での広報活動は欠かせない取り組みの1つである。なぜならば、筆者らが支援を行っていることを生徒たちに知ってもらわない限り、筆者らの活動は広がりをもてないからである。そこで筆者らは以下の2つの取り組みを行った。

1つ目の取り組みは、始業式での挨拶である。筆者らは昨年度より始業式において、生徒に対し年度始めの挨拶をする機会を得ており、今年度はその場を活用して新入生を含めた全校生徒の前で支援メンバーの紹介、HSの開室日時、活動内容などの説明を行った。2つ目の取り組みは、印刷物の発行である。昨年度に引き続き、4月中に筆者らの活動内容が記載されたチラシを作成し、先生方を通して生徒へ配布した。また、今年度より新たにほっとステーション通信（相談室通信のことであり、以下、HS通信とする）の発行を開始した。この取り組みは、HSと筆者らの活動を周知したいという思いから始めた試みである。発行は1年間に6回行われ、主に活動内容やHSの利用方法、季節の話題や学校行事を中心に作成を行った。最終号では次期支援メンバーの紹介と現支援メンバーとの別れをテーマに作成を行う予定である。またこれらの内容に加えて、先生方から就労支援につながる内容を入れてほしいとの依頼があったため、コラムとして支援メンバーのアルバイト体験を記載している。作成したHS通信は先生方を通じ

て生徒に1枚ずつ配布し、各教室とHSにも掲示した。また、生徒対応時にHS通信について〈私たちこんな書いてるんだよ〉と話題にすると『ちゃんとみてるよ』と返答する生徒もあり、その時には『こんなバイトしてたんだね』とアルバイトについて話し合うこともあった。

## 5. 共有ファイルについて

筆者らは先生方との情報共有のため、毎回の支援活動終了後、その日に対応した生徒との関わりについて一人につき一枚程度の分量で共有ファイルを作成し、教員室にて保管している。筆者らが支援を行っている定時制高校では、先生方の教員室が学年によって2つに分かれており、1つの教員室で全学年の先生方とコンタクトを取ることは難しい。また、先生方の忙しさや筆者らの活動時間の関係上、十分な話し合いの場を設けることも難しい。井上・大川・澁川(2014)において「当初はファイルの存在が先生方になかなか認知されなかった」とあったことから、筆者らは今年度から学年の先生方が手に取りやすいよう、共有ファイルの置き場所をそれぞれの学年の教員室に分けた。

## 考察

### 1. 今年度の活動内容について

改訂版支援モデル(井上・大川・澁川ら 2014)を用いて、今年度の活動内容を①浸透化、②GW、③相談活動、④授業内支援、⑤支援メンバー内での活動、⑥先生との連携、の6つの構成要素別に考察する。尚、考察の関係上各支援モデル内に他の要素との関連がある場合、( )内にその番号を記載する。

#### ① 浸透化

浸透化は「非専門家である部外者(支援者)が、当事者の独自の文化に溶け込むための一連の日常的な働きかけ」(山見・細見・吉川ら 2013)と定義される概念であり、井上・大川・澁川ら(2014)は改訂版支援モデルにおける基

盤の1つとして位置付けている。昨年度に引き続き、始業式での挨拶や日々行っている校内巡回、学校行事への参加など様々な浸透化のための活動を行った。そして今年度は更なる浸透化を図るため、昨年度に改名したHSと筆者らの活動を生徒に周知することを目的にHS通信を発行した。こうした広報活動は井上・大川・澁川ら(2014)が指摘している通り「来室者数が増加してしまい、来室生徒への対応が不十分になりかねない」という危険性をはらんでおり、現に今年度の来室者数は昨年度と比べ倍以上となったことで生徒対応に追われるということもあった。しかし、学校という独自の文化に溶け込む浸透化の視点から考えると、HS通信は学校全体に対してHSという場所があり、そこで何をしているのかを知ってもらうということに大きな意義があったと言えるだろう。

#### ② GW

2年目(倉石・横谷・梅井ら 2012)以降より毎年2回1年生を対象にGWを実施することがこの活動の一つとして定着してきた(①)。今年も実施までに何度も担当の先生方と協議を重ねたことから、毎年入学してくる生徒や担当の先生方によってニーズが変化することが分かった(④)。生徒個人のコミュニケーション能力の向上はもちろんだが、今年は生徒数が増え様々な事情を抱えた生徒も多かったことから、とりわけGWが生徒間の交流を深めクラスに馴染むきっかけとして先生方が重視されていることがうかがえた。また、生徒たちにHSや大学院生の存在を知ってもらい、GWを通して筆者らも生徒への理解を深めるという狙いもあった(①)。

実施については、昨年同様なかなかルール通りに進まないグループもあったが、楽しそうな様子や自分なりのやり方でも最後まで参加している姿が見られた。GWを通して気持ちを表現することの難しさや生徒同士での意思の疎通ができたときの喜びなど、友達とコミュニケーションを図ることの大切さを知るための機会を作ることができ、生徒のコミュニケーション能力

の向上に繋がったと感じている。課題としては、臨機応変に対応することやルールを明確にし、分かりやすくするなど生徒の取り組みやすさに焦点を当てた工夫をすることが挙げられた。また、これまでも考案から実施に至るまで先生方から意見をいただきながら共同で行ってきたが、本年度は初めて“はじまりの会”が設けられた。そのため情報の共有だけでなく、これまで以上に先生方と一丸となってこのGWを有意義なものにしようという意識を共有できたように感じた(⑥)。GW終了後も校内巡回や授業内支援へ行った際、HSを利用していない2年生以上の生徒から『1年生の時にGWしてた人や』など声を掛けられることも多かった。このように普段関わりのない生徒と接点を持つことができるGWの重要性と4年間の積み重ねを実感し、この活動が浸透化の一助を担っていることが示された(①)。

### ③ 相談活動

井上・大川・渋川ら(2014)において、相談活動は生徒や先生方が筆者らの存在を周知しているという①を基に成り立っている活動であると示されており、今年度も引き継ぎ当初は支援メンバーの周知を心がけて活動を行った。特に前期はHSに留まらずCSや昼休みの校内巡回に力を入れたことで、自らHSに来室する生徒や支援メンバーの名前を覚え話し掛けてくる生徒も多くなっていった。その結果は今年度の対応生徒数を見ても一目瞭然であり(Table 2. 参照)、徐々に増加していることから、やはり①が強く影響し筆者らの存在が広く周知されていたことが確認された。

HSへ継続して自発的に来室する生徒の中には、相談というよりも息抜きや話し相手として利用しているように感じる者も多い。これは3期(山見・細見・吉川ら2013)4期(井上・大川・渋川ら2014)と同様に、生徒がHSを積極的に自分の居場所として活用しているからであろう。それに加え、HSだけでなくCSや校内巡回の際にも生徒によっては非常に繊細な話をす

る場合もあり、筆者らをそうした話ができる存在として活用していると考えられる。このように、生徒にはHSという安心できる居場所を求める気持ちと、悩みを聞いてくれる存在を求める気持ちという2つのニーズがあり、筆者らの相談活動はこの2点を満たすものであったと考えられる。この考察を踏まえ、周知されてからもこちらが出かけていくことで生徒のニーズを幅広く捉えることができるため、CSや校内巡回は浸透化だけでなく相談活動としても重要な役割があり継続すべきであろう。また、先生方からのリファーマーや気になる生徒の情報を共有することにより来室に繋がった生徒も少なくない。こうした筆者らの活動と先生方のご協力により、多くの生徒が自発的に来室することで徐々に複数の生徒での会話も増え、最近では生徒たちのHS以外における交流も見られつつある。このようにHSを通して、学業面や対人関係に何かしら困難を抱えている生徒同士が、関係性を構築できたことはコミュニケーション能力の向上や今後の社会適応にも繋がっていくと考えられる。しかし、該当する生徒間においても上下関係や衝突が生まれやすく、今後はHS内におけるトラブル対処が課題として挙げられる。

### ④ 授業内支援

昨年度(井上・大川・渋川ら2014)の配布方法に則り、今年度も前期と後期の初めに先生方へアンケートを配布した。前期のアンケートを全ての先生へ配布できたことは、昨年時間をかけて説明したことが授業内支援への関心や期待度の高さに繋がった結果だといえる(①⑥)。回収したアンケートには欄外に支援に関するコメントが記入されているものもあり、今までの活動から①⑥を基盤に授業内支援への理解が広がっていることを示している。しかし、返答をいただいても支援日時の関係で伺えないことがあったため、後期は支援日時に該当する先生方のみアンケートを実施し、直接手渡し説明をする形で配布・回収を行った。これによって、先生方の支援ニーズ、そして活動全体に対する意

見もいただいた(⑥)。こうした手順を踏むことにより、先生方にとって授業中のどのような出来事が気がかりと感じられているのかを把握した上で支援を行うことが可能となっていた。また、授業へ入ることで、支援メンバーの存在を知らない関わりの少ない生徒に筆者らやHSについて知ってもらえる機会にも繋がった。

#### ⑤ 支援メンバー内の活動

支援活動はメンバー6人が3人ずつに分かれ週2回行っており、昨年までと同様に活動内容に関する記録を作成することで情報共有を行った。また、年間を通して活動する曜日を固定したことで各曜日の支援メンバーが常に別日の活動内容を把握することができ、生徒同士のトラブルが起きた場合にも全ての支援メンバーが状況を理解した上で支援が可能となった。そうした記録に加え、必要に応じて支援メンバーが直接話し合いを行うことによって一貫性と連続性を持った支援を行うことができた。また、先生方からのご意見やご相談に対しても支援メンバー間で話し合った上、迅速な対応をすることができるなど、支援メンバー内での連携強化が先生方との連携につながることも考えられた。

#### ⑥ 先生との連携

昨年度に引き続き、毎回の活動後に支援の内容を先生方と共有するため、共有ファイルを作成した。この共有ファイルは管理上の問題から、2つある教員室の片方で管理してもらうという形をとっていたが、昨年度末から先生方と協議を重ね、今年度は教員室ごとに共有ファイルの保管場所を確保することができた。これによって、すべての学年の先生と接する機会が作れ、これまでは交流のなかった先生からもコメントをいただいた。

その他にも、②や④においてその前後に打ち合わせや振り返りを行うことによって、先生のニーズを把握し、共通認識を持った上で支援に入ることが可能となり、更なる連携強化に繋がった。また、2月には教員をはじめスクールソーシャルワーカーや就職コーディネーターの先

生方が参加する校内支援委員会への出席も予定している。その一方で、授業内支援を行えるのは、筆者らが活動している時間に行われている授業に限られてしまうため、関われる先生に偏りが生じることもあった。また、支援後の振り返りは、直に先生と情報共有が行える機会であるが、時間がない日などはごく簡単なフィードバックをすることしかできないため、授業内支援用の共有シートを作成するなど、先生との情報共有をより確かなものにする必要があると考えられる。

## 2. 改訂版支援モデルの相互作用について

井上・大川・渋川ら(2014)は、①⑤⑥を支援の基盤とし、②③④というメインの支援活動があるという改訂版支援モデルを提示した。このモデルにおいては、①と⑥を重視し、この2つを同時並行かつ継続して行うことで基盤が築かれ、それを維持することで充実した支援活動ができるとしている。今年度はこの改訂版支援モデルに沿った支援活動を行い、その妥当性を検討した。

実際に筆者らが行った活動でも①と⑥を重視し、HS通信の発行や先生との情報共有を積極的に行った。その結果、前者ではCSや校内巡回において生徒から声をかけられるなどHSを利用する生徒が増え、後者では先生からHSを利用している生徒の情報や編入・転入した生徒に関する情報をいただいた。これは井上・大川・渋川ら(2014)の指摘の通り、①と⑥を継続することで基盤ができ、支援活動が充実するということを示している。また、今年度はそれだけでなく、②③④の活動が①⑥につながり、改訂版支援モデルは相互に関連して循環していることが分かった。これらを図示すると以下のようなになる(Figure 1参照)。このモデルに沿って例を挙げるとするならば、②によってそれまでHSを利用したことのなかった生徒がHSを知り、利用するに至ったこと、先生と授業内支援の振り返りを行うことによって、より密に連携



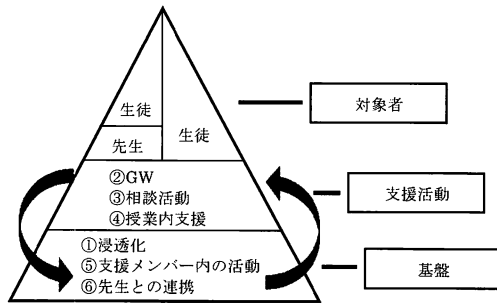


Figure 1. 改訂版支援モデル（循環型）

をとれるようになったことなどが挙げられる。これらは②と④の支援活動によって、さらに①と⑥の基盤が強固になるということを表している。すなわち、支援の基盤となる①⑤⑥と具体的な支援である②③④は相互に作用し合っており、両者を充実させることで良い循環が生まれ、支援活動全体が活性化していくのである。以上の今年度の活動から、改訂版支援モデルの有効性は明らかである。

## 今後の課題

### 1. 先生方との連携強化

今年度の活動では、昨年度に比べてHSを利用する生徒が大幅に増えた。これは、筆者らができる限り授業内支援を行ったことや、校内巡回、HS通信の発行等の取り組みにより、HSに入室したことのない生徒とも関わりを持つことができたためであると考えられる。そのため、筆者らが把握する生徒の情報量が格段に多くなった。筆者らは、それらの情報を毎回の支援ごとに生徒の記録を先生方との共有ファイルにまとめているが、先生方も多忙であるため十分に閲覧することが難しい状況が依然としてあり、院生からの情報が先生方に伝わっているか否かについて確認できないというのが現状である。そこで、支援の中で気になった生徒がいる場合は、職員室に挨拶に行った際に直接先生方と対話を持ち、積極的に情報共有を行っていくよう

努めることが今後活動を行っていく上で重要である。

### 2. 支援の位置づけ

手探り状態から始まった定時制高校の支援も5年を経て、支援体制や先生方との連携など、支援開始当初では思いもよらなかったような変遷を辿り、筆者ら大学院生の活動内容は年々幅広くなってきている。そこで、中島・津田・中條ら（2013）が行ったようなインタビューによる先生方への調査や、先生方との話し合いの場を設けることによって、先生や生徒のニーズを把握し、それらと筆者らの提供できる支援を相互に擦り合わせていく必要があると考える。活動内容を精査し、学校のニーズに対して、筆者ら大学院生の専門性をより活かすことができるような支援体制を築いていくことが課題である。

### 謝辞

今年度も貴重な学びの機会を与えて下さった定時制高校の皆様方に心より感謝致します。今後とも尽力して参りますので、引き続きご協力のほどよろしくお願い致します。

### 文献

- 井上菜々・大川慧・澁川沙由理・中西達也・西中さおり・矢野礼花・清水達哉・妹尾美鈴・中田行重（2014）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その4）—改訂版支援モデルの提示—『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』4：11-20.
- 倉石百合子・横谷幸美・梅井茜・高石唯・船曳奈央・中条淳博・津田政志・中田行重（2012）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その2）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』2：71-78.
- 文部科学省（2012）：平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について：81.
- 文部科学省（2014）：平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査について」：94.
- 中島妃佳里・津田政志・中條淳博・井上菜々・細見知加・山見有美・吉川真衣・西中さおり・中田行重（2013）：定時制高校に対する地域臨床的支援の意義：インタビュー調査を通して『サイコロジスト：関西大

学臨床心理専門職大学院紀要』3：89-97.

中田行重・中村絢・日野唯香・丹羽由子・福山侑希・菅野百合子・横谷幸美（2011）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』1：23-31.

山見有美・細見知加・吉川真衣・西中さおり・中条淳博・津田政志・中島妃佳里・井上菜々・中田行重（2013）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その3）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3：79-87.